

## 日出島部落と割り箸

釜石の大洋漁業第十二あさひ丸に転船して、最初に仲良しになったのは、佐々木吉良さんだ。船員の殆どは宮古出身で、佐々木さんは、宮古から約十キロ北の日出島部落の生家から乗船していた。

釜石を基地にしているが、一航海終えると宮古に回航、二、三日休養する。全員自宅や、生家に帰って休む。私だけ船に残ることになる。佐々木さんは脊が高いが気だての優しい人で、私を泊まりに誘ってくれた。日出島とは、佐々木さん家の直ぐ前の海岸より百米ばかり沖にの小島である。その名前をとって、その辺を日出島部落と云い、三陸リアス海岸の風光明美な国定公園内の一郭だ。

泊った翌日に佐々木さんに、サツパ（手漕ぎの小型船）に乗せられ近くの断崖絶壁や、洞窟になっている間を潜ったりし楽しませて戴いた。その時の写真が残っている。

ピロウな話であるが、その時トイレに入った時、生まれて初めて見聞き驚いたことがある。終生二度と巡り会えない事柄である。

私達が小さい頃、田舎のトイレの大きい方の利用は似たりよつたりだ。離れの小さい小屋にあり、厚い板二枚、間を置いて敷いてある。泊った次の日、私も入り屈んだら、目の前に変わった物がある。木の箱が二つ並べて置いてあり、片方の箱には綺麗な

割り箸が、イッパイ入れてあり、別の箱には、割り箸の中程が、黒くなつた物が入れてある。何だろうと思つたが、深く考えず、備え付けの紙が無いので、何かを利用したと思う。

佐々木さんに聞いたら、紙の代りに、利用するのだそうだ。三本位使うそうだ。あの辺は質のよい杉材を産する。二十センチ位に切り、割り箸のように作る。使用した後は風呂の焚き物になると云つていた。一石二丁で面白い、今は無いだろう。当地でも語り草になつてゐるのだろう。

佐々木さんを、「きつつあん」と誰もが呼んでいた。大洋漁業に転船してから、下船するまで一緒だった。船団を組んで、赤道直下で操業していた時の、スナップ写真の内。吉さん「きつつあん」のスナップが多い。大きい金目鯛を抱えた写真、ブリツチの上から禪一つで飛び込んだもの、思い出の多い人だった。昭和三十年下船、三十一年仙台に家電店を開店した後、何年かが過ぎて風の便りに「きつつあん」が病気で入院、兄嫁（義姉）の手厚い看病で全快したが、退院したあと直ぐに逝つてしまつたそうだ。

どうして、逝つたかおしえて貰つたが、真偽の程は私には分らない、信じたくない。私と妻の胸に深くしまいこんでおく。様々な思いが渦巻く。